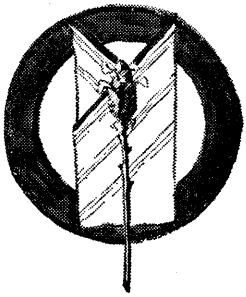
フレーベルの活動の跡を訪ねて

岩崎次男



ペスタロッチ＝フレーベル＝ハウス

私のフレーベル研究は大学の学生時代にはじまった。それ以来、もちろんフレーベルだけを研究してきたわけではないが、長い年月がたつ。この研究の過程で、私は文献をとおしてフレーベルが生きた風土を推察してきた。そして、私はこの推察が少しでも実際にたしかめられれば、と願ってきた。この願いが、幸いなことに、一昨年及び昨年と二回にわたってかなえられることになった。

一昨年はじめてドイツを訪れた時、最初に見学したのは、西ベルリンの、この施設の創立者の夫の名前をとって名づけられたカルル・シュラーダー街にある、ペスタロッチ＝フレーベル＝ハウスであった。このハウスは、マーレンホルツ＝ビューロウ夫人が設立した民衆幼稚園(1)をゆずり受けたシュラーダー＝ブライマン夫人が、一八七四年、これをもとにベルリンの貧民及び労働者の子どもや女性のための総合施設として拡充発展させたものであった。そしてその後今日まで一世紀のあまりの長きにわたって、このハウスは、ドイツのフレーベル運動の中心であること及び多数の幼児保育者を輩出することなどによって、ドイツの幼児保育をリードする役割りをはたしてきた。このようなハウスを、さらには、わが国の子どもの福祉と教育にその生涯を捧げ、ユニークな保育実践を行ったキュックリヒ女史を輩出したこのハウスを見学する

ことは、感激であった。このハウスには、今日、保育所[2]、幼稚園、学童保育所、小児科診療所、社会福祉職員・教員養成大学、児童公園、ベルリン保育所協会などがおかれ、このハウスの児童の福祉と教育のための多彩な活躍ぶりがしのばれた。

このハウスの創立者シュラーダー＝ブライマン夫人は、フレーベルの姪娘であり、晩年のフレーベルに直接教えを受けた。彼女は「フレーベルを正しく利用するためには、とくにペスタロッチを正しく理解しなければならないと説き、「ペスタロッチとフレーベルとの融合」にもとづく独自な教育の思想と実践を発展させた[3]。このような立場から、ペスタロッチ＝フレーベル＝ハウスという名称が生まれてきたのである。

ペスタロッチ＝フレーベル＝ハウスが創立された一八七四年、ドイツのフレーベル運動を結集する組織、「ドイツ・フレーベル連合」が結成されたが、この組織が第二次世界大戦後の一九四八年には、「ペスタロッチ＝フレーベル連合」として再発足することになる。このことからみても、ペスタロッチ＝フレーベル＝ハウスの、あるいはシュラーダー＝ブライマン夫人の理念が今日も継承され生きつづいているように感じられる。ドイツの幼稚園が児童福祉施設として位置づけられてきたこと、今日もなお西ドイツではそのように位置づけられていることは、このペスタロッチ＝フレーベル＝ハウスのあり方と深くかかわっていると思われる。

フレーベルの主たる活動舞台——テューリンゲンの森

ついで、私たち[4]はフレーベルの生地オーバーワイスバハ、フレーベルの主著『人間の教育』が生まれてきた、かの有名なカイルハウ学園[5]のあったカイルハウ、及び幼稚園の創立されたバード・ブランケンブルクを訪れた。これらはテューリンゲンの森の東北部に位置している。

一昨年のドイツ訪問で最後に訪れたところは、バード・リーベンシュタイン、マリーンタール及びシュワイナである。これらの土地は、フレーベルがその晩年を送ったところである。バード・リーベンシュタインは、今日もエピソードとして語りつがれている[6]、当時のドイツの第一級の教育学者ディースターヴェークやフレーベルの第一の使徒と言われるマーレンホルツ＝ビューロウ夫人とフレーベルとの出会いの場所であり、マリーンタールはフレーベルが亡くなったところであり、シュワイナにはフレーベルの第二恩物を象った墓がある。これらの土地は、テューリンゲンの森の西北部にある。

このようにみてくると、フレーベルはテューリンゲンの森の中

で生まれ、育ち、活動し、そしてそこで亡くなった、といってもよいように思われる。テューリンゲンの森はドイツにおいてとくに自然の美しいところとして定評がある。そして、テューリンゲンの森に抱かれたこれらの土地はすべて田舎である。とくに、フレーベルが生まれ育ったオーバーワイスバハは、テューリンゲンの森の最も奥深いところにある。この田舎で、フレーベルは信仰厚いプロテスタントの牧師の息子として生まれ、育てられた。

フレーベルの生涯は多くこのような田舎でおくられたが、[7] このテューリンゲンの森に接して、その北側にほぼ一直線に、アイゼナハ、ゴータ、エアフルト、ワイマール、イエナ、ドレスデンなどの、ドイツ文化を綺爛と花咲かせた諸都市が並んでいる。アイゼナハにはルターが隠棲し、ドイツ語訳聖書を完成したワルトブルク城がある。ゴータは世界最初の義務教育制度を確立したゴータ公国の首都であり、その近くのシュネッペンタールには長く栄えたザルツマンの汎愛学院があった。エアフルトには、人文主義大学として改造され、そこにルターも学んだ大学があった。ワイマールはゲーテとシラーの町として有名であり、当時、ドイツ文化の一つの中心地であった。イエナにはシラー大学があり、ここではシラー、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルらが教鞭をとり、当時ここにはロマン主義の風潮がみなぎっていた。ドレスデンは「北のフィレンツェ」と称され、ドイツ最大の芸術都市である。

フレーベルはこれらの都市のかもしだす文化の香りにもふれて、育ったと思われる。事実、フレーベルはイエナ大学に学んでいるし、また教育者の運命がまちかまえていたフランクフルト／Mに行く途中、アイゼナハを通り、ルターの事績をしのんでいる。

フレーベルの教育思想の若干の考察

かくて、フレーベルの教育思想を育んだ風土は、美しい自然、純朴な、信仰厚い田舎及びロマン主義文化を中心とするドイツ文化であったといってよいように思われる。素朴な片田舎で純朴に、信仰厚く育てられたフレーベルを想定してみてはじめて、私たちはフレーベルが『人間の教育』の冒頭で語った言葉――「万物の中に一つの永遠の法則があって、作用しかつ支配している。この万物を支配している法則の基礎に、神が必然的にある」――この言葉でもって展開されているフレーベルの汎神論的あるいは万有在神論的世界観、及びこの世界観にもとづくフレーベルの児童神性論を理解することができるであろう。彼の児童神性論は、カトリック教会の成立に向って歴史的に人為的に形成されてきたキリスト教的原罪説的人間観と異なるものであるが、世界の多くの純朴な人々の心の共鳴を得ることができたように思われる。わ

が国でも子どもは神からの授りものという言葉があるが、この言葉に代表されるような児童観が、非常にすんなりとフレーベルの児童神性論及びそれにもとづくフレーベルの教育原理を受け入れさせたであろう。そこに、フレーベルの幼稚園が半世紀ばかりのうちに世界にひろがって、世界の幼児教育制度の根幹をなした原因の一つがあったように思われる。

テューリンゲンの森の自然の美しさは、実際に見なければ、わからない。それほどの自然の美しさが、フレーベルをして自然の中にも神が宿り、自然を手本にして教育を考えるべきことを主張させたように思われる。フレーベルにとって、自然の美しさは自然の中にある神性の表現であり、自然の、とりわけ樹木の生長は人間の成長発達の鑑であり、自然に対する人間の適切な営み——農業や園芸——は教育の原理にも通ずるものであった。そこから、受動的・追随的教育の原理が主張され、栽培活動の教育的意義が強調され、子どもたちの庭としての幼稚園の名称が考え出されたりしたのであった。[8]

フレーベルは彼の連続的発達観の中に弁証法的発達観を含みこませることによって、幼児を発見することができた。[9] そして、その幼児の最高の発達の姿が、子どもの内心あるいは内的欲求の自由な表現である遊びである、と考えられた。このような考えが今日もその発想に学ぶべき恩物の考案に結びつき、幼稚園の保育内容を創造的な、また共同的な遊びを中心にして構成する、今日もなお重要な構想を生みだしたのであった。

このようなフレーベルの教育思想がロマン主義といわゆる「教育学の世紀」[10]などによって特徴づけられる当時のドイツ文化の中で醸成されたことも、言うまでもない。フレーベルが三月革命前夜における最も徹底したドイツ国民教育の主権者であるといわれる場合、その国民教育論には明白にフィヒテのそれの影響が認められるし、さらには、ルター以来築かれてきたドイツ民族文化への憧憬がこめられているようにも思われる。

再度フレーベルの遺跡を訪ねて

昨年再び、しかしこの度は独りで、私はテューリンゲンの森を訪れた。一昨年シュワイナを訪れた時、アルテンシュタインの丘に行く機会がなかったし、また、カイルハウをゆっくり見学する時間がなかったからである。今回は、この両者について心ゆくまで見学することができた。アルテンシュタインの丘は山ともいうべきもので、そこにはまことに美しいアルテンシュタイン城があり、その前が開けている。この広場で、一八五〇年、フレーベルによって最も「盛大な子ども遊び祭り」が行われた。近隣近在の

町や村から小学校や幼稚園の教師たちにひきいられた子どもたちが三百人以上も集まり、沢山の観衆の中で、フレーベルの指導の下に、行進遊びや円陣遊びなどからなる、多彩な運動遊びが展開された。それはフレーベルの幼稚園の原理の一大デモンストレーションであったが、この美しいアルテンシュタイン城の前の、なだらかに傾斜した広場は、それにうってつけであるように思われ、しばし私はそこで往時をしのんだ。

カイルハウでは、フレーベル博物館長ヒューベナー氏の案内で、一昨年短い時間のため遂に発見できなかった、フレーベルの教育事業にその生涯を捧げた二人の協力者、ミッデンドルフとランゲタールの墓に詣でることができた。またヒューベナー氏に会うのに若干の時間があったので、私はカイルハウのあちこちを散策することができた。フレーベルはカイルハウと山一つへだてたバード・ブランケンブルクとの間をよく行き来したはずである。そして、一八四〇年の春、その山道からバード・ブランケンブルクの町を見下ろしながら、幼稚園の名称を発見したといわれる、有名なエピソードがあるが、その山道はどこであろうかと、私はカイルハウ学園[11]の裏手の山をあちこち歩いてみたりした。

それにしても、カイルハウは大変な田舎である。それは彼の生地オーバーワイスバハに劣らないほどである。こうした片田舎に身をおいてみてはじめて、フレーベルが『人間の教育』でかかげた生活理想、「信仰、勤労及び節制」の生活――祈り、働き、節制する生活――がすんなり理解されるように思われた。それはまことに素朴な生活理想であるが、心を高くもち、勤勉に働き、欲望を適切に抑制する生活は、普遍妥当の生活理想でもあるように思われる。それはかつて中世修道院の理想であったが、今日もなお生活の理想たりうるように思われる。昨年はまた、私はスイスにおけるフレーベルの活動の跡（ワルテンゼー、ウイリザウ及びブルクドルフ）を訪れた。この訪問は、恐らく、日本人としては私が最初ではなかろうか。その報告については、すでに他の所で公けにされているので、[12]ここではくりかえさない。

スイスの活動の地も含めて、フレーベルが活動した場所は多く田舎である。そして、彼が相手にした子どもたちは、多い時でも四〇人をこえる時はなかったと思われる。このようなまことに地味な状況の下にあっても、生涯にわたって燃やしつづけた、あのフレーベルの教育情熱の火はどこから来ただろうか。この問いを、私はカイルハウの界隈を散策しながら、またワルテンゼーの小さな城からゼンパッハ湖を見おろしながら、問いつづけた。

〔注〕

(1) 幼稚園はフレーベルの創立後、徐々に階層分化し、上流階級の幼児を対象とする家庭連合幼稚園、中産市民層の幼児を対象とする市民幼稚

園、及び貧民、労働者の幼児を対象とする民衆幼稚園などが生まれた。これらは市民学校や民衆学校等に対応する呼称である。民衆幼稚園には、在来の託児所が幼稚園の原理の導入によって改造されたものもあり、長時間保育の、無料の又は低廉な保育料しか徴収しない幼稚園であった。これにあたるイギリスやアメリカのものは、無料幼稚園とか慈善幼稚園とか呼ばれたりした。

(2) クリッペ。三歳未満の乳幼児対象の保育施設。

(3) シュラーダー＝ブライマン夫人の思想と事績については、梅根悟監修『幼児教育史1』、世界教育史大系21、講談社、昭和四九年、二八二～二九一頁、及び岩崎次男編『近代幼児教育史』明治図書、一九七九年、三九～四二頁を参照されたい。

(4) 一昨年のフレーベル遺跡の訪問は、埼玉県私立保育園連盟の方々と一緒であった。

(5) この学園は「一般ドイツ教育舎」と称し、『人間の教育』はこの学園で試みられている教育を論じたものであることが、明記されている。

(6) マーレンホルツ＝ビューロウ男爵夫人はいつものようにバード・リーベンシュタインに保養に来た。そして、彼女は宿の亭主に、何か変った珍らしいことはありませんかと尋ねた。宿の亭主は、こんな田舎ですから別段変ったことはありませんが、最近どこからか爺さんがやって来て、毎日百姓の子どもたちを集めては遊んでばかりいるので、「馬鹿爺さん」と呼ばれ、それがちょっと評判をよんでおります、と答えた。夫人は早速保養仲間と一緒にこの爺さんの見物に出かけた。そして、この爺さんが子どもたちに打ちこんでいる真摯な姿に打たれ、爺さんが情熱をこめて語る子どもの教育の深い意味にふれ、夫人はすっかり感動してしまった。そして、夫人はその後の生涯をこの爺さんの提唱する教育事業に捧げることになった。この爺さんがフレーベルであり、そして時は一八四九年であった。

同じ年、ディースターヴェークもバード・リーベンシュタインに来ていた。そして、同じように、彼もフレーベルに実際に接するようになって、フレーベルの教育学的魅力の虜になった。そのため、三週間の保養の予定が三か月にものびてしまったといわれる。その間、ディースターヴェークは足しげくフレーベルのもとに通い、フレーベルの教えを受けたが、同じようにフレーベルのもとへ通っていたのがマーレンホルツ＝ビューロウ夫人であった。夫人たちの連れて来た上流階級の子どもたちが、フレーベルの指導の下に全く平等に貧しい百姓の子どもたちと一緒に遊んでいる姿を見て、ディースターヴェークはこれこそが後の世にきっとその真価が認められることになるであろう、「ほんとうの国民幼稚園」だと叫んだのであった。その後、彼は二人の娘をフレーベルのもとへ派遣して幼稚園教員として養成し、フレーベル運動に対する支援を惜しまなかった。

(7) ただし、フレーベルが生涯、教育者としての道を歩くようになる転機が作られたフランクフルト／Mは、当時も大都市であった。今日、大変貌をとげているこの都では、フレーベルの活動の跡――ペスタロッチ主義者グルーナー校長が指導し、フレーベルが教師としての第一歩を印した模範学校、及びフレーベルが家庭教師をしたホルツハウゼン家の邸宅――をしのぶことはできない。

(8) 幼稚園の名称は、園丁が庭で植物を育てるやり方が受動的・追随的教育の原理をよく表現していることによって、また幼稚園には、子どもたちが個人的に、あるいは集団的、協同的に栽培活動を行う庭を設けなければならないことによって、フレーベルによって考え出された。

(9) フレーベルの発達観については、岩崎次男編、前掲書を参照されたい。

(10) 一八世紀後半から一九世紀はじめにかけて、汎愛主義者たちを中心に、ドイツでは沢山の教育論が公けにされ、新しい教育の試みが行われた。それは近代市民社会を生み出す教育的努力であったが、世にドイツのこの時代を指して「教育学の世紀」という。

(11) 今日、カイルハウ学園の建物は言語治療学校として利用されている。それは社会主義国家らしいフレーベルの遺跡の利用であると思われた。

(12) 『近代幼児教育史研究会会報』第一〇号、一九八一年三月、五七頁。